

課 題 名：歴史・自然・科学の視点を融合した展示手法や五感による展示理解学習の実践

交付番号：24013

機関名及び氏名：北九州市立自然史・歴史博物館 上野 晶子

## 実施内容報告書

### 1 事業の目的

本事業の目的は、歴史系の特別展の入口に自然や科学などの他分野も含めた融合展示や、五感を使った体感展示・講座を通して、子どもから大人までが歴史を楽しく学ぶ手法を研究するものである。

### 2 実施事業内容

#### (1) 歴史・自然・科学の分野を融合した導入展示の工夫

展覧会入口であるオープンスペースにおいて、砂糖及び鉱物に関する展示をおこなった。砂糖については、福岡県朝倉市でおこなわれている三奈木砂糖製造の映像を通して、伝統的な砂糖作りを紹介した。その横には、白砂糖、黒砂糖、グラニュー糖などの代表的な砂糖を標本展示し、砂糖の製造工程によって色や形が異なることを示した。また、折尾愛真高等学校製菓部によるマジパン細工、大原学園製菓コースによるパスティヤージュを展示し、砂糖を加工する文化や技術を紹介した。

また、あわせてシュガーロード連絡協議会の協力により、日本遺産「砂糖文化を広めた長崎街道～シュガーロード～」の展示もおこなった。このコーナーは、来館者の視点が生活に身近な食品としての砂糖から、歴史や文化としての砂糖や菓子へと移行することを狙ったもので、パネル展示だけでなく、菓子のパッケージやサンプルを展示することで、来館者の注目を得ることができた。

鉱石については、当館岩石・鉱物担当学芸員の協力により、春夏秋冬の菓子をテーマに、春は牡丹餅に似た赤鉄鉱、夏は琥珀糖に似た蛍石、というように、菓子に似た鉱石を展示した。意外な組み合わせに足を止める方が多くみられた。



砂糖製造の映像と砂糖標本



折尾愛真高等学校によるマジパン細工



大原学園によるパスティヤージュ



お菓子に見える鉢物の展示

## (2) 五感を使った体感型展示と講座の実施

### ①体験型展示

会場入口のオープンスペースには、嗅覚の体験として菓子の香りの素材のサンプルを設置した。アレルギーを考慮し、クイズ形式にはせずに、容器にはあらかじめサンプルの名前やイラストを表示した。また、展覧会入口のアイキャッチや来館記念撮影を目的に、パティシエ衣装を着た撮影コーナーと顔出しパネルを設置した。

会場内には株式会社如水庵の協力により、上菓子製造動画と、上菓子の名前パネルを設置し、花や果実をモチーフにした上菓子の作り方や、和菓子職人の技術を紹介した。また、上菓子の名前パネルは視覚・聴覚・触覚を意識した2枚重ねのクイズ形式とし、観覧者が名前を声に出し、どのような菓子かを想像させた後、上のパネルをめくると菓子の画像が見られるようにした。

また、考古担当学芸員による唐菓子の再現展示をおこない、文献や絵画史料にみえる唐菓子の形をより詳しく紹介することができた。

### ②講座

株式会社虎屋虎屋文庫では、虎屋に伝わる菓子の見本帳や古文書、古器物などについての研究や展覧会などをおこなっている。今回の展覧会でも資料を出品いただいたことから、虎屋文庫上席研究員森田環氏による江戸時代の菓子文化についての講演をおこなった。講演では身近な菓子の変遷や、江戸時代の人びとの美意識と菓子など、菓子の歴史と文化について詳しく知る機会を作ることができた。参加総数は93名で、当館歴史友の会会員以外的一般の方も多く訪れており、新たな客層の開拓につながった。

また、折尾愛真高等学校製菓部によるマジパン作りイベントを通して、パティシエを目指す高校生の活動紹介と細工菓子の魅力を伝えることができた。マジパン作りのイベントは定員30名に対し、98名もの応募がある人気講座であった。参加者は小さなお子様も多く、マジパンの加工や高校生との交流を楽しんでいた。



撮影コーナー



お菓子の香りコーナー



菓子製造動画（株式会社如水庵提供）



上菓子の名前パネル



唐菓子の再現展示



講演会の様子



マジパン作りイベントの様子

### (3) 子ども向けワークシート及び解説パネル作成

来館した子どもたちが展示資料に注目するためのツールとして、ビンゴ風カードを作成し、無料配布した。このカードには各時代を象徴する菓子のイラスト 16 点を掲載し、展示を見て該当する菓子を見つけると穴を開ける形式とした。これまでの歴史系展示に比べると、会場内を何度も往復してじっくりと展示資料を見る光景が多くみられた。

解説パネルについては、展示の内容に関するめくり式のクイズパネルを設置した。歴史上の人物をイラスト化し、視覚的にも楽しいパネルに工夫した。



ビンゴ風カード

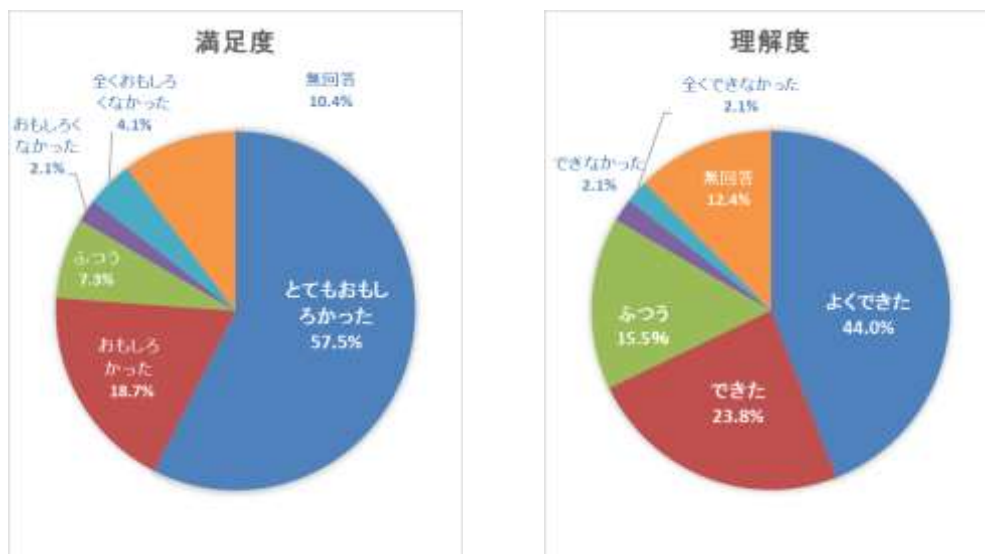


クイズパネル

## 3 事業の成果

今回の展覧会は身近な「菓子」をテーマとした歴史系の展覧会であったが、古代から近世までの海外との交流や社会に関する内容もあり、歴史を学ぶ前の子も達にとってはやや難しい内容であった。総入場者は 24,209 人で、当館の自主企画で最多の「トイレのうんちく展」(2022 年) 27,192 名、次いで多い「なつかしい暮らしと道具展」(2023 年) 26,006 名に次いで 3 番目の入場者数であった。歴史資料に加え、砂糖の結晶化や菓子に似た鉱物、マジパンやパステイヤージュなどといった、様々な分野の展示をすることで、「菓子」を様々な視点で考えるきっかけ作りをすることができたと考えている。また、他分野の学芸員だけでなく、シュガーロード連絡協議会をはじめ、砂糖や菓子関係の企業や学校などと連携して展覧会をおこなうことができた。

会場内に設置したアンケートの回答 193 件のうち、満足度や理解度をみると、半数以上が満足・理解できたとの回答があり、概ね目標は達成できた。印象に残った展示について年齢別にみると、小学生の多くは展示よりも香りの体験コーナーやビンゴ風カード、クイズなどの回答が多かった。特にビンゴ風カードは大変好評で、増刷して来館者全員に無料配布したことから、大人も楽しんでいる様子もみられた。また、展示資料では菓子の再現展示など、視覚的に分かりやすいものの印象が強かったようである。



#### 4 今後の課題

「歴史を楽しく学ぶ」ことを目的に、来館者が自身の体を動かして五感で感じる様々な展示や講座をおこなうことができた一方、展覧会そのものに組み込んだ形ではなく、補助的なツールとしての役割を果たすものであった。そのため、来館者への誘導や展示を楽しむという点では効果があったが、より深い理解へ導くには課題が残る。

特に歴史系の展示に多い古文書などの文字資料については、キャプションやパネル以外の工夫が今後の課題としてあげられる。

また、特別展でのストーリー構成で完結しており、特別展での学びを常設展へつなぐという取り組みをおこなうことができなかった。見学旅行や修学旅行などの団体見学が多い時期でありながらも、団体の来場が予想よりも少なかったことから、学校教育での単元とのつながりを意識するなど、展覧会の魅力を来館者の身のまわりを結びつける視点を持ち、今後の企画に繋げていきたい。